

序 論

- 何よりも、まず、安有実・テホご夫妻に有楽ちゃんのご誕生おめでとうございませうと申し上げたい。また私の病、带状疱疹のために祈って頂いたことを感謝します。顔の左半分、特に眼と頭、その内でも目の痛みが激しい状態ですが、徐々に回復していることを感じている。今週は、LAのコンファランスでの役割、次の日曜日のご奉仕の機会を頂いていたが、それらをすべてキャンセルした。
- さて、先週学んだことは、私たちの人生、殊に、信仰生活は、悪魔との戦いであることである。
- それは、時々、大きな試練があるときだけでなく、いつもである。先週もそれに触れたが、聖書はそのことについて、このように言う。ペテロ第Ⅰの手紙5章8節「……」。
- 戦いに勝つために大切なことは、相手の策略を知ることである。ですから、パウロもこのように言う。Ⅱコリント2章11節「……」。
- なぜなら、悪魔は、自分を天使にさえ偽装して私たちに欺くからである。Ⅱコリント11章14節「……」。
- 今日は、その悪魔の代表的策略を、先週も学んだ、イエス様が、洗礼を受けた後、荒野で40日間断食をした直後、悪魔から受けた試練・誘惑の記事から学びたい。
- イエス様は、ここで3回、3種類の誘惑を受けているが、それらは一つ一つが、私達も同じように、毎日の生活で、人生で、受ける悪魔からの誘惑を象徴的に代表している。
- 今日は、物足りなく感じるかもしれないが、その内の一つだけを取り上げることにする。
- 即ち、「石をパンに変えよ」と言う悪魔の言葉である。**(このみ言葉を聞いたり、読んだりしるたびに、思い出す「お話」を余談として紹介したい：あるミッション・スクールの入学試験で、この言葉の意味を問う質問：「人はパンだけでなくジャムもバターも必要だと言う意味だと思います」と答えた女学生)

本 論

I. まず、最初に考えたいことは、この誘惑の第一印象として、これのどこが誘惑なのか、この誘惑のどこが悪いのか？という問題である。

A. ここで、イエス様が置かれた状況を考えて見たい。

1. ここで、イエス様は、40日間断食をした後で、腹がペコペコであったはずである。
 - (1)誰もが、今イエス様に必要な物は、パンであり、パンを食べることであると思う。
 - (2)でも、そこは荒野で、パン屋もなかったし、パンもなかった。
2. 更には、イエス様は、神の子として奇跡を行う力を持っていると言う好都合があった。
 - (1)今、目の前に人間として必要があるとき、神の子として奇跡を起こして、そこにある石をパンに変えることは当然の権利ではないか。誰がその誘惑に抵抗できるか？
 - (2)そのどこが悪い、何にも悪くないと思うのが普通ではないか。

B. また、そもそも、パンを求めると言うのは、私たちの生活の基本である。

1. パンを求めることは、よっぽどの高級パンを求めたり、大食いしようとしているのではない限り、それは人間の基本的要求である。
2. ここで、言われているパンと言う言葉のギリシャ語と、「主の祈り」の中の祈りの言葉、「我らの日用の糧を今日も与えたまえ」の「糧」のギリシャ語とは同じ、ARTOSである。
3. 即ち、パンを求めるとは、イエス様も、「主の祈り」の中で祈るように勧めている基本的必要である。それを求めることは当然のことであり、どこも悪くないと言いたい。

II. では、なぜ、イエス様は、このとき、石をパンに変えるべきではないと思われ、「NO」と言われたのか？

A. 注意しなければならないことが一つある。イエス様は、ここで、石をパンに変えることは「いつでも」悪い、と言っておられるのではない。

1. それは、ある時は「良い」ことにもなり、ある時は「悪い」ことにもなるのである。
2. 現に、イエス様は、わずか5つのパンと2匹の魚を大量に増やして、男だけで5000人はいた群衆のお腹を満たされた。パンを一杯作られたのである。或る時は水を酒にも変えた。
3. また、前述の「主の祈り」で申し上げたように、イエス様は、私たちが「パン」を求めることを日々の祈りとするように勧められたのである。

B. それではなぜ、イエス様は、この時、石をパンに変えなかったのか？ それは何を意味しているか？

1. 第一の理由は、イエス様は、そのとき、「石をパンに変える」と言う言葉の背後にある悪魔の誘惑の「真意」を見抜いていたからである。
 - (1)「石をパンに変える」と言うのは、イエス様と悪魔との間では、単に、その時イエス様が必要としていたパンを作り出すこと以上のことを意味していた。
 - (2)イエス様にとって、「石をパンに変える」とは、ご自分の奇跡の力を使って人々に「パンを与える」救い主になることへの誘惑であった。
 - (3)即ち、それは、最も手っ取り早い、ポピュラーな救い主像であった。悪魔は、ここで、そのような救い主になるように、イエス様を誘惑したのであった。
 - (4)現に、イエス様が、前述の5つのパンと2匹の魚で、男だけで5000人の人々を満腹させたのを人々が経験した時、何が起こったか？
 - ヨハネ6章 14-15節を見たい。そこには、人々が、今や、遂に自分たちにパンを与える救い主が到来したと大喜びして、イエス様を王様にしようと殺到したとある。
 - 勿論、そのとき、イエス様は、人々のそのような欲求を拒んで、山の上に逃げられた。
 - イエス様は十字架以外に救いの道はないことをご存じであった。だから悪魔はいつもイエス様を十字架の道から脱線させようとした。十字架前夜のゲッセマネの祈りの時も。
 - イエス様がここで悪魔に従って奇跡の力で「石をパンに変える」ことは、象徴的にイエス様が「十字架による救い」の道を放棄して、パンを与える救い主になることであった。
 - もし、イエス様が、この誘惑に勝たなかったら、私たちに十字架による救いはなかった。
 - (5)聖書は、私たちがキリストに従うために負うべきそれぞれの十字架があると言っている。
 - 「誰でも、私について来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そして私について来なさい」(マタイ 16章 24節)と。
 - 悪魔は、イエス様の場合と同様に、私たちが、十字架を回避して、安易な道、妥協した道、部分的服従をもって、イエス様に従うようにと誘惑してくる。
 - それは、イエス様の場合と同様に、自分の空腹を満たしたいという、人間としての当然の権利を、放棄してでも取るべき十字架である。
 - 当然の権利の放棄は、服従の証しと共に、信仰の証しである。神は必ずほかの道をもって必要を満たしてくださると言う信仰の証しである。
 - それがマタイ 6章 33節の信仰である。神様は、天の父として、私たちの人間としての当然の権利と必要をご存じであり、それを必ず満たして下さると言う信仰告白である。
2. 第二の理由は、この誘惑は、「人を生かしているものが何か？」と言う点について、人々を神ご自身と神の言葉である聖書から引き離す誘惑であったからである。
 - (1)イエス様は言われた：「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つのことばによる」。即ち、人を生かすものは、神の口から出る言葉、聖書である。
 - (2)「生きる」と言う言葉には「二つ」の意味がある。
 - 一つは、勿論、「肉体的に生きる」という意味である。
 - ・多くの人たちは、肉体的命を支えているのは、物質的な見える世界だと思っている。
 - ・具体的に言うなら、肉体的命を支えるのは物質としての食べ物、ここで言うならパンであり、そのパンを与えるのはそのために働いている父親・母親であり、彼らを雇い給料を払ってくれる会社であると信じている。
 - ・それゆえ、私たちは、肉体の命、地上的生活に関しては、無意識のうちにも、困ったことが起こらない限り、それら物質的、肉体的、地上的な物に頼っている。
 - ・だから父親や主人が病気になり、会社の経営が傾くと、奥さんが、家族が急に真っ青になり、祈り始めるのである。
 - ・私たちは、なんだかんだ言っても、神様に頼るよりも、見えるものにより頼んでいる。
 - ・しかし、見えるものは当てにならない。いつ倒れるか、変わるか分からないのである。
 - ・それらの見えるもの、それが人間であれ、会社であれ、それらを支えているのは、神様の約束の言葉、即ち神の口から出る言葉、聖書である。

- ・イエス様は、自分に与えられた奇跡を行う力ではなく、神の約束の言葉に信頼して生きることを選ばれたのである。
 - ・それは、前述したようにいつも信仰の道であり、時に自分を危険に晒すことでもある。
- (3) もう一つの「生きる」ことの意味は、「霊的に生きる」ことである。
- 聖書は、ハッキリと「肉体的に生きていることと、霊的に生きていることとは違う」と。即ち、肉体的に生きていながら、霊的には死んでいる人がいると指摘する。
 - ・「あなたは生きているとされているが、実は死んでいる」(黙示録 3 章 1 節)
 - ・「あなたがたは、自分の罪過と罪の中に死んでいた」(エペソ 2 章 1 節)。
 - このときのイエス様は、確かに肉体の命のために食物(パン)を必要としていた。
 - しかし、イエス様が仰ったように、人はパンだけで生きるのではない。パンだけでは、人間の肉体は生かされても、魂が、霊が生きていくことはできない。
 - 魂が、霊が、心が、生かされ、養われなければ、どんなに体が強くて、頭が良くて、その人は、生ける屍であり、決して目の輝いた、魅力的な人生を生きることはできない。
 - それでは、魂は、何によって生かされるのか？ 何が私たちの魂、霊、心を養うのか？
 - ・多くの人々に沢山の、それこそ為になる、良い話し、倫理的・道徳的な話しを伝えた、聖人の代表とも言える儒教の始祖、孔子でさえ晩年にこう言った。「悪を知りてこれを改めることができない。善を知りてこれを実行することができない。これが私の憂いである」と。道徳的、倫理的、宗教的、いわゆる教えの限界である。
 - ・善悪の教え、それを聞いても、それを知っても、行うことができないのである。
 - ・パウロもかつてイエス・キリストに出会う前の自分を振り返り、ローマ書 7 章で同様の告白をしている。彼が経験したことは、たといそれが聖書であっても、それを単に宗教の教え(彼の場合ユダヤ教)として受け入れるだけなら、自分を道徳的、宗教的に苦しめるだけで、救えなかったと言う。
 - ・それでは、私たちの魂、霊、心を変え、養う力はどこから来るのか？ イエス様は言われた。「それは神の口から出る一つ一つの言葉による」と。聖書の言葉である。
 - ・しかし、それは、単に知識としての「聖書」ではない。聖書をどれだけ知っても、それでは強くなる。心は養われない。
 - ・私たちは、まず聖書の一句一句を、単に偉人の言葉としてではなく、**唯一絶対の神の言葉として**、信じ受け入れ、それに従うことである。I テサロニケ 2 : 13
 - ・また、聖書の言葉を、単なる道徳的、倫理的な生活のために必要な知的訓示・教えの媒体としてではなく、ヨハネの福音書の冒頭に記されている、**言葉なる神としてのイエス・キリストご自身として**、聖書を、信じ受け入れることが、生命的に必要である。
 - ・聖書を受け入れることは、イエス様を受け入れることである。イエス様を受け入れることは、聖書の言葉を受け入れることである。それは愛する人の言葉を慕い、受け入れるのと同じである。
 - ・ヘブル人への手紙 4 章 12 節「神の言葉は生きていて、力があり・・・」とある。

結 論

- 悪魔は、聖書の言葉が、このように、私たちの信仰生活、人生に、大切なものであることを知っている。懸命に、私たちを、生ける神の言葉である聖書、イエス様ご自身である聖書から、私たちを離そうとする点で攻めて来る。
- 一世紀以上前の有名な大衆伝道者 DL ムーデーは、このように言った。「聖書が、あなたを罪から離すか、罪が聖書からあなたを離すか」と。
- 聖書を読む時間が：テレビや他の本を読む時間と同じでなければならないと言わない(もし、できたら、それは素晴らしいことである)。しかし、今より、他の本、新聞、テレビ、iPhone、iPad、PC の時間を少し減らしても、もう 5 分でも、10 分でも、20 分でも聖書の時間を延ばせないか？！
- 実際に聖書で生かされた証人、3 重苦の偉人ヘレンケラーの言葉をもって締めくくりたい。：「私が毎日最も愛読する書物、それは聖書です。私の辞書に“悲惨”という文字はありません。聖書はダイナミックな力であり、変わることはない理想を示すものです」と。